

「ホロコーストとともに生きる」へのレスポンス

徐京植

いまこうしてサラ・ロイさんと直接お会いする機会を得て、私は、彼女のきわめて重要なテキスト「ホロコーストとともに生きる」を初めて読んだときの感銘を改めて想起しています。

岡真理さんが翻訳してくださったお陰で、二〇〇五年の春になって私はこのテキストを眼にすることができました。ある出版社のささやかなPR誌『みすず』に掲載されたこのテキストに目を留めた人は、それほど多くはないでしょう。おそらく、彼女の居住地である米国においても、事情は同様であろうと想像します。こうした言説は、いらだたしいほど控えめにしか流通せず、ごくささやかな人々にしか読まれず、その影響力は決して大きいとはいえないでしょう。しかし、ほとんどの人々が非理性的な排他主義へとなだれを打っ

て転落している時に、必要な場所で、必要なタイミングで、必要なことが語られたということは重要です。もし、そういう理性の声がまったく発せられなかったとしたら——そう考えると、その重要性には疑問の余地はありません。

注記を見ますと、サラ・ロイさんは二〇〇二年四月八日に、このテキストのもとになった講演をなさいました。それがどういうタイミングであったか、すこし想像してみましょう。

パレスチナでは二〇〇〇年九月からアル・アクサー・インティファダ（第二次インティファダ）が激しく闘われていました。二〇〇一年八月に南アフリカのダーバンで開かれた国連人種差別撤廃会議においては、多数の参加国が、イスラエルによるパレスチナ地域の軍事占領と統治を「あらたな形態のアパルトヘイト」だと非難し、さらにシオニズムを人種主義と規定し、イスラエル軍によるパレスチナ民間人虐殺を「種族掃討または大量虐殺」だと強く非難しましたが、

これに反対してイスラエルと米国が会議から撤退するという出来事が起きました。

〈九・一一〉事件が起きたのは、ダーバン会議閉幕の直後です。二つの出来事間に直接の関係があるかどうかは分かりませんが、大きく見れば、〈九・一一〉はダーバンへの応答と見ることも可能であり、この事件を絶望的な悪循環の象徴と読むことは困難ではありません。

〈九・一一〉の直後、ブッシュ大統領は「対テロ戦争」を布告しましたが、米国民の八〇パーセント以上が熱狂的にそれを支持しました。それはパレスチナ地域では米国の強力な後ろ盾を得たシャロン政権による占領地への軍事侵攻となってあらわれしました。二〇〇二年四月、イスラエル軍は西岸地区のジェニン難民キャンプを包囲し、報道陣や国際赤十字を閉め出して、軍用ブルドーザーで住民もろともキャンプの家々を押しつぶし、戦車やヘリコプターで無差別に攻撃を行なっていました。いわゆる「ジェニンの虐殺」です。

サラ・ロイさんの講演は、まさにこのタイミングで行なわれたのです。

「ホロコーストとともに生きる」というタイトルだけを見てその中身を読まなければ、少なからぬ人々がこのテキストはホロコーストの物語を利用してイスラエルの非道な占領政策を正当化しようとする底意のものと即断したことでしょう。「対テロ戦争」という非理性的な熱狂が支配する場で、「ジェニンの虐殺」が進行しているときに、みずから「ホロコースト・サヴァイヴァーの子ども」と名乗る彼女が、このテキストを発表したのです。まさに、必要な場で、必要なタイミングで、それを語るにふさわしい人によって語られた、理性の声であるといえます。その声はささやかであっても、数年の時差と何千キロという距離を越えて、このように、他者である私に届きました。

昨年末からのイスラエルによるガザに対する軍事攻撃は、ジェニンの虐殺を上回る規模のものです。古くからの幾つもの傷の上に加えられた、この新しい傷の

血がまだ乾かないいま、サラ・ロイさんを迎え、彼女のテキストを再読することが、必要なタイミングで行なうべき必要な知的作業であることは疑いありません。おそらく、この場に参加した皆さんのうち幾人かにも彼女の理性の声が届くであろうと期待します。

もちろん、歴史上の多くの事例の示すように、理性の声は無力です。

「対テロ戦争」の熱狂は、理性の声を蹴散らして、とうとう二〇〇三年春のイラク侵攻を実現してしまいました。ひとつの国家が破壊され、数十万の人々が命を奪われました。開戦の口実となった「大量破壊兵器」は結局存在しなかったことが今では明らかとなりましたが、ブッシュ氏も米国政府も、またそれを支持した米国民も、まったく責任を問われていません。付け加えて言えば、「イラクに大量破壊兵器が隠されている」という米国に無条件に追従した日本の政府も、それを支持した日本国民も責任を感じてすらいません。

「ユダヤ人対アラブ人」「ユダヤ教対イスラム教」

「西洋文明対イスラム文明」といった虚偽の対立構図を用いてする暴力行使の正当化を根本的に批判し、「占領と被占領」という対立構図にこそ問題の本質があるというシンプルで真実を粘り強く説いてきた人物たちの一人がエドワード・サイードでした。いわゆる「パレスチナ人」の側にサイードが存在し、いわゆる「ユダヤ人」の側にサラ・ロイが存在するという事実そのものが、単純で暴力的な対立構図を煽るイデオロギーへの貴重な抵抗であったといえるでしょう。

エドワード・サイードはアルメニア難民出身のデービッド・バーサミアンによるインタビュー（『ペンと剣』）の中で、こう話っています。

「僕らがいるのはどうやら最後のフロンティアであり、本当に最後の空を見ているらしい。その先には何もなくて、僕らは滅びていく運命にあるらしいことはわかっているのだけれど、それでもまだ、僕らは「ここから、どこへ行くのだろう」と問いかけているので

す。僕らは別の医者に診て貰いたい。「おまえたちは死んだ」と言われただけでは、納得しません。僕らは進み続けたいのです。」（五六頁）

そのサイードが二〇〇三年九月に亡くなりました。〈九・一一〉の二年後、イラク戦争開戦の半年後でした。サイードは孤独でした。米国で多くの理解者を得ない彼は、実はパレスチナにおいても多くの理解者を得ていません。そのどちらにおいても、異なった意味ではありますが、彼は「場ちがい」であり、「よそ者」なのです。

彼と同じように孤独な者、すなわち複数の共同体にまたがる人生を誠実に生きようと努め、そのことのためにどの共同体においても多くの理解者を得ることができない者は、この世界に少なくありませんが、今のところ、その者たちのそれぞれが、それぞれの場所で「場ちがい」であり、孤独なのです。その「場ちがい」な者たちは互いの姿をはるか遠くに認め、互いに出会おうとしています。しかし、互いを分断し隔て続け

る壁はなお高く鞏固です。

私はサラ・ロイさんもサイードがそうであったのと同じ意味で、孤独であろうと想像します。

アウシュヴィッツの生存者であったイタリアの文学者、フリーモ・レーヴィは一九八二年のイスラエル軍によるレバノン侵攻とサブラ・シャティエーラの虐殺事件に際して、「イスラエルは攻撃的ナショナリズムに傾斜している。ディアスポラ・ユダヤ人の歴史に存在する寛容の系譜を再評価すべきだ」という趣旨の控えめな見解を表明しましたが、そのためにイスラエル在住のアウシュヴィッツ生存者仲間たちから「針のような非難の手紙」を受け取り、ユダヤ人共同体から孤立しました。レーヴィはその五年後、一九八七年に自殺しています。私はレーヴィの孤独の深さを想像すると同時に、現代の世界において「理性的であろうとするもの」「寛容の価値を説こうとするもの」が不可避に支払わなければならない代償の重さを想像せざるを得ません。サイードもこのような代償を支払ったのであ

り、おそらくサラ・ロイさんも、そのことを自覚しているのではないかと思います。

レーヴィ、サイド、サラ・ロイ……こうした人びとのテクストに接する私たちが、その高貴な代償を忘れて、ただ知的資源として消費してよいはずがないと思うのです。

私は韓国の日刊新聞『ハンギョレ』に四週間に一回ずつコラムを連載しています。もともとは二週間に一回でしたが、現在の世界的大不況の影響がここにも及んで紙面が削減され、私の連載も回数が減らされたのです。

さる一月二五日付けで、私が書いたコラムの一部をご紹介します。

■「おれの心臓を舐めてみる、毒の味がするから……」

荒廃しきった表情の老人が、カメラを見据えて、そ

う言う。クロード・ランズマン監督のドキュメンタリー作品『ショアー(SHOAH)』の一場面である。

(…)一九四三年四月、ワルシャワ・ゲットー内のユダヤ人戦闘組織がわずかな武器を手に絶望的な反乱に決起した。この蜂起はおよそ一カ月後に鎮圧されたが、五万六千人あまりのユダヤ人が捕らえられ、うち七千人は殲滅、七千人はトレブリンカ絶滅収容所で処理、これ以外に五、六千人が爆破や火災で死亡、残りは各地の収容所に送られた。これに対してナチス側の死者はわずか一六人だった。冒頭の台詞は、このワルシャワ・ゲットー蜂起を辛うじて生き延びた生存者の言葉だ。

いま、パレスチナのガザ地区で、瓦礫の中に放り出された人々が、同じ台詞を口にしているに違いない。

(…)イスラエル国家とその国民によるこの犯罪を「ホロコーストの犠牲者であるユダヤ人によるもの」と語る修辞は一面的であり事実と反する。それは冷笑主義を鼓舞するだけで、その克服には役立たない。「ユダ

ヤ人」と「イスラエル国家」は厳密にお互いに区別すべき概念だ。

サラ・ロイという人物がいる。彼女に「ホロコーストとともに生きる」と題するエッセイがある。ホロコーストで肉親の多数を失った彼女が、研究のためにイスラエルに往来するうちに、どのように覚醒したかが、このエッセイで語られている。彼女はその地でパレスチナ人が日常的に経験させられている屈辱、恐怖、人間性の破壊を身をもって知ることによって、自分の親たちの世代がナチス時代に経験されたことへの想像力を得たというのだ。

こうしたユダヤ人知識人がひとりでも存在すること、それがあっていえば「希望」であるといえよう。■

担当編集者が伝えてきたところでは、このコラムが掲載された後、ソウルのハンギョレ新聞社編集部をイスラエル大使館員が訪れたそうです。大使館員はイスラエルに関する「均衡ある報道」を懇切に要望した後、

そのコラム(私の書いたもの)だけは到底、受け入れられないと強い口調で言明したとのことだ。

そのような出来事があったので、わたしはその次に書く予定していたテーマを変更して、もう一度パレスチナをテーマに書きました。二月二五日付けのコラムの一部をご紹介します。

私はそのコラムの前半をサラ・ロイさんのテクストの内容紹介に費やしました。そして、あのきわめて象徴的なエピソード——ロバを引いた老人と孫がイスラエル兵士に辱められるエピソードを引用した後、次のように続けました。

■この光景を目撃した時、ロイさんは両親が自分にしてくれた、数々の逸話を思い出したという。齒ブラシで歩道を磨くよう強制されたこと、公衆の前で顎ヒゲを剃り落とされたことなど、一九三〇年代にユダヤ人たちがナチによってどう扱われていたか、という逸話である。「あの老いたパレスチナ人の身に起きたこ

とは、その原理、意図、衝撃において、それとまったく等しいものだ」と彼女は気づいた。人間を辱め、人間性を剥奪することにおいて、過去のドイツ兵と現在のイスラエル兵の間に違いはない、ということに。

「占領とは一つの民族が他の民族によって支配され、剥奪されるということだ。彼らの財産が破壊され、彼らの魂が破壊されることだ。占領がその核心において目指すのは、パレスチナ人たちが自分たちの存在を決定する権利、自分自身の家で日常生活を送る権利を否定することであり、彼らの人間性をも否定し去ることだ。占領とは辱めであり、絶望である」

ロイさんのこうした思想は、ユダヤ人の経験とパレスチナ人の経験を、対立させてとらえるのではなく、普遍的な苦難の経験としてとらえることで両者をつなぐこととするものだ。彼女は言う。「私にとってホロコーストの教訓とはつねに、特殊な(ユダヤ人の)問題であると同時に、普遍的な問題だった。ここでもっとも重要なことは、この二つを決して分けることは

きない、ということだ。二つを分けることは、どちらの意味も矮小化することになる。」

エドワード・サイドは二〇〇〇年に受けたインタビューで、次のように語っている。「一九六七年第三次中東戦争以来のイスラエルによる西岸地区とガザ地区の占領は(二〇世紀と二一世紀におけるもっとも長い入植・軍事占領なのです。それ以前に最長であったのは一九一〇年から一九四五年にかけての日本による朝鮮半島占領です。イスラエルによる占領はいよいよ最長記録に届こうとしています。『文化と抵抗』」

サイドの視野には朝鮮半島が入っていた。日帝占領下の朝鮮で起こった出来事の具体的な事実を彼は知らないかもしれない。しかし、彼は植民支配と占領というものを本質的に理解していたので、同じ占領の苦難を経験した朝鮮民族を視野に収めることができたのである。

さて、私がここで問わなければならないのは、私たち自身のことである。私たち朝鮮民族は自らの苦難の

経験を他者への想像と共感にまで高めているだろうか？ サイドのように、自分たちが三六年間も経験した占領の苦しみを、いまパレスチナ人たちが経験しているのだと想像してみる人がどれくらいいるだろうか？

産業構造が近代化したとか、生産力が増大したとか、さまざまな理由をつけて植民地時代の真実を覆い隠そうとする言説がある。こうした議論に決定的に欠如しているのは、「占領とは辱めであり、人間性の破壊だ」という観点だ。このことを直視する能力がないか、あるいは直視する勇気のない人々が、「あの時代も悪くなかった」と言いたがるのである。そういう人びとは結局、自分自身の歴史を偽っているだけではない。いま占領下で苦しんでいる全世界の人びとに敵対しているのである。■

このコラムは今週土曜日に掲載される予定です。あまり読者が多いとは言えませんが、少なくともイスラ

エル大使館員だけは熱心に読んでくれることでしょう。

きょうのサラ・ロイさんとの対談に「新しい普遍性へ」というタイトルをつけることを提案したのは私です。この言葉は、もともとエドワード・サイドから借用しました。彼は九〇年代の初期に書いた「民主主義、人権、解釈」という論文で、「新しい普遍性 new universality の構想」という問題提起をしています。西欧世界が独占してきた「普遍性」に対し、第三世界の側から多様な介入や異議申し立てをすることによって、新しい普遍性の構築へと進まなければならないという主張です。それは、西欧スタンダードの普遍性に対する全面的追従でもなければ、その全否定でもない、いうならば人類共有の普遍性へ向かう弁証法的過程を示唆するものでした。私はこのアイディアに大いにインスパイアされ、たとえば一九九六年にベルギー在住のパレスチナ映画監督、ミシェル・クレイフィとの対談に際しても、この言葉をキー概念として

議論しました。

きょう、サラ・ロイさんと私は「ホロコースト・サヴァイヴァーの子ども」と、「植民地被支配者の子ども」として、ここで出会っています。私たちは相互に異なるコンテクストを生きてきましたが、互いに交錯し、重なり合うものもきつと多いはずですよ。

たとえば、一九四八年はイスラエル建国の年であり、パレスチナ人にとってはナクバの年ですが、私たち朝鮮民族にとっては日本からの解放後三年目にして故国が南北に分断された年です。パレスチナの分断と朝鮮の分断、この二つの事件は偶然に同じ年に起きたのではありません。近東と極東という遙かにかげ離れた地域で起こったこの二つの事件は人類史における植民地支配、軍事占領、そして国民国家体制という時代の結節点を示す事件であるといえます。そして、パレスチナも朝鮮も、疼き続ける分断の傷に苦しんでいます。パレスチナと朝鮮の問題を正しく解くという課題は、人類史における植民地主義、占領、国民国家体制とい

う難問を正しく解くという課題と同義であるとすらいえるでしょう。そのためには、この二つの事件をむすぶ文脈を統一的なものとして理解し、その解決のために資する「新しい普遍性」を私たち自身が構築しなければならず、その下に連帯しなければなりません。

かつて私が「新しい普遍性」について論じたレイフイ氏は、映画「スベシャルリスト」の監督として知られるユダヤ系知識人、エイアル・シヴァン氏との合作で『ルート181』という優れたドキュメンタリー映画を製作しました。この作品そのものが、占領体制を根底から批判するという視座を共有するところから出発した、パレスチナ人とユダヤ人との連帯の試みであった、いわば「新しい普遍性」の構築に向けた試みであった、そう私は理解しています。

きょうのサラ・ロイさんとの対話もまた、そうした困難ではあるが必要な努力の一端であると私は位置づけております。

## 徐京植

用意しましたこのレスポンスに、もう少し補足をいたします。

韓国の読者を対象に、在日韓国人である私が、このコラムで「わたくしたち」と言うときには、それは「We, Korean」という意味です。私は研究留学で韓国に二年間滞在しましたが、パレスチナ問題に対する関心が必ずしも高くない、ということにひじょうに残念な思いを致しました。同時に、ここに書きましたように、日本による植民地支配の時代は数字的に見れば必ずしも悪くなかった、というような言説（植民地近代化論）がかなり台頭しております。そういう、いま韓国でホットなイシューとこの問題とを結びつけようとする意図がこの文章にはあるということです。

ただし、これを日本のコンテクストに置き換えるときは、「わたくしたち」すなわち、ここにいる日本の人間がパレスチナ問題に対してどういう認識でいるのかということは、また、別の角度から、さらに一歩踏み込んで検討すべき問題であろうと思います。

それからもう一つ。おそらく今日のテーマの一つになると思いますが、韓国で私がつきあった範囲の人びとのなかでは、保守派は親イスラエルであり、進歩的な人びとは当然反イスラエルで親パレスチナというふうに非常に明確に分かれます。しかし、そういう進歩派は、ホロコーストについて語る、ということ自体への拒絶感をもっているようです。私がブリーモ・レーヴィについての著作を出しているということは早尾さんから紹介頂いたとおりですが、いまなぜブリーモ・レーヴィの本なんか

岡真理＋小田切拓＋早尾貴紀 編訳

サラ・ロイ Sara Roy

# ホロコースト から ガザへ

パレスチナの政治経済学



戸塚 ☎862-9411

横浜市立図書館



2043764252

青土社